

ホストファミリーを通じて学ぶ

いとう あきひで
伊藤 彰英

基幹労連・組織グループ・中央執行委員

以前と比較して、「留学」という学習形態は随分一般化してきた。専門的知識の習得はもとより、語学留学や夏休み等を利用した短期留学、最近では親子留学なども話題に上っている。もちろんそれぞれに目的と効果が存在しており、諸外国の生活や文化、歴史に直接五感で触れることは大変有意義である。またそれ以上に、日本という国を外から客観的に判断する機会を得ることは、個人にとっても将来の日本にとっても素晴らしいことであり、多くの人がこうした経験を有することができればと思う。

しかし、多数の日本人留学生在が渡航する割には、日本には留学生を受け入れる体勢や風土が整っていない。日本人留学生の多くがホームステイなどの経験をしているはずであるが、日本では外国人留学生のホームステイを受け入れるホストファミリーは、留学を経験させている家庭の数十分の一でしかなく、留学家庭と被留学家庭の割合が著しくアンバランスな実態にある。確かに、家庭で実際に留学生を受け入れようとした場合、日本語で意思疎通の図れない学生と毎日生活することは大変であろう、共働きでは生活管理が難しいと思う人がいるかもしれない。また住居が狭いということに気をしている向きもあるだろう。

一方でこんな事例もある。先日、ホストファミリーを探している知人から「ドイツ人高校生の受け入れが決まっていないのでお願いできないか」という連絡があった。我家にとっては4人目の受け入れでもありもちろんOKと答えた

が、実は、留学生を受け入れてくれるホスト高校が、私宅から通学可能範囲内では見つからなかったのである。結局彼女は新たなホストファミリーとホスト高校が見つかるまで留学時期をずらすことになった。残念なことである。

グローバル社会のもとで今後ますます国際経験が必要になると言われてはいるが、こうした実態を目の当たりにすると、日本の国際化も胡散げに思われる。知識や語学の習得、観光など、自らの興味の対象には目の色を変えて積極的になるが、留学生の受け入れ（文化の理解）のような面倒なことからは、家庭や学校はできる限り距離をおきたいと考えている。こうした意識が日本の外交にも見え隠れするという見方は、あながち飛躍しすぎた発想ではないだろう。日本の現状を鑑みれば、国としての興味や利益の対象には積極的になる反面、相手の立場を慮ったり、文化や歴史を理解しようとする気持ちに欠けている結果と判断せざるを得ない。

留学生を受け入れるということは、相手の文化を尊重しつつ、日本の文化をいかに紹介し、理解してもらうかということである。そのためには自らが国際的に見た日本という国の価値観を理解していなければならない。敢えて付言すれば、こうした認識をもつことが、世界の一員として日本の国際化にも大きく影響をもたらすのであり、留学よりも、むしろ多くの人にホストファミリーを経験していただくことを、切に願うものである。